

ガラテヤ書5章1-12節 「オール・オア・ナッシング(All or Nothing)」

1A 異邦人の割礼 1-6

1B 奴隷の頸木 1

2B キリストの恵みの無効化 2-4

3B 望みによる義 5-6

2A 邪魔をする者たち 7-12

1B 真理に逆らう者たち 7-9

2B しかるべき裁き 10-12

本文

ガラテヤ人へ手紙 5 章を開いてください。今日は、1 節から 12 節までを見ていきたいと思いません。私たちは前回、4 章で、自由の女であるサラの子と、奴隷の女ハガル子であるイシュマエルの子の対比を見ました。イサクは、神の約束を信じるアブラハムによって生まれたけれども、イシュマエルは、その約束を肉の努力によって達成しようとして生まれた子であります。イサクは、不妊の女から神が生まれさせたのであり、それは信仰によって御霊の新生を受けた私たちを表している、イシュマエルは、肉によって神の義を達成しようとする者たちを表しています。けれども、結局、イシュマエルは、奴隷ハガルと共にアブラハムの家を追い出されて、約束を受け継ぐことができませんでした。このように、パウロの話は、信仰によって自由を得ているということと、律法によって奴隷状態になっているということをお話していました。

そこで5章は、「自由を得るために、あなたがたはキリスト者になっているのだよ」ということをパウロは話しています。キリスト者になれば、これまで自由であったのに、いろいろな掟や規則の中に入って、それらを守って神の国に入れると思ったら大間違いです。今まで、いろいろな慣わしや規則があって、その中から自由にされて、キリストにある神の愛の中で自由にされているのだということです。自分は自由の中にあるのだと思っていたけれども、本当の自由を得て、それでいかに自分が束縛されていたかに気づきます。自分を救おうとして救うことができず、がんじがらめになっていたこと。罪に、また人の作った慣わしに縛られていたことが分かります。

1A 異邦人の割礼 1-6

1B 奴隷の頸木 1

¹ キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは堅く立って、再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい。

「自由を得させるために」という言葉を、ガラテヤの人々が来た時に、ローマ社会の奴隷制度の

ことを思わずにはいられなかったでしょう。多くの人が奴隷であり、自由人は一部にしかすぎませんでした。自由にされる、解放される喜びは、私たち以上に切実な者であったに違いありません。

自由とは何か？基本的に恐れからの自由です。自由というのは、政治的には「捕えられない自由」と言えるでしょう。かつてソ連で迫害を受け、人質交換で釈放されて、イスラエルに移住したユダヤ人で、ナタン・シャランスキーという人がいます。彼は、一つの国の自由の度合いを、「公の広場で、政府批判を大声でできる自由」と定義づけました。私的な場で人に聞こえないようにするならば、それは自分が捕えられるという恐れがあるからです。自由というのは、恐れから解放されている状態です。

キリスト者は、霊的に恐れから解放されています。それは、自分が悪いことを行なって、その結果、神から罰を受けるという恐れから解放されているということです。「ヘブル 2:14-15 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、15 死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」キリストの死によって、神の怒りは満たされました。神はキリストにあって私たちを見ておられます。そして、永遠の愛で私たちを愛しておられます。二度と、自分の過去の罪が取り上げられることなく、思い出さないでおられるというところにある自由です。「Iヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」

まだ自由にされていない時は、「これこれを行なわなければ、私は今の問題から解決されない」として、強迫観念に駆り立てられて、何かを行なうことによって自分の罪の問題を何とかしようとして、その恐れを使って律法に従うようにさせるのが、律法主義の問題です。神に愛されているから従うのではなく、神に罰せられるから、恐れで従うのです。しかし、それはあくまでも自分を救おうとしていることで、自己中心的なのです。自分を救おうとして、ますます自分が罪深いことを知り、罪の虜にされていることを知ります。これが奴隷状態です。これは、カルト宗教の問題であるでしょう。強迫観念によって、ますますのめり込みますが、まさに奴隷状態なのです。けれども、カルト宗教の問題だけではなく、社会のいろいろな場面で、恐れによって私たちを縛っているものが数多くあります。この恐れから、神は私たちをキリストにあって解放してくださいました。神の愛があるので、もはや、その恐れに囚われなくなりました。恐れるのは主であり、他の人々でなくなりました。(ル 12:4-7 参照)。

そこで、「ですから、あなたがたは堅く立って」という勧めがあります。この自由の中に生きないといけません。神の愛の中に自分自身をしっかりと保っていないといけません。さもなければ、いつでも、どこでも、自分を再び奴隷にする感わしがあるからです。今まで自分の力で救いを成し遂げようと思っていた所が、それが全くできないことを知ってキリストを信じたのにも関わらず、そこで御

霊が与えられたのにも関わらず、肉の力で完成させようとしたら、奴隷の頸木を負わされることになるのです。

興味深い例えを、注解書で読みました。米国においてリンカーン大統領による奴隷解放宣言がなされた後のことです。南部における奴隷の女性がいますが、彼女は混乱しました。「私は自由になった。でも、まだ自由でないのかしら？」と思ったそうです。なぜなら、自分の主人のところに行くと、「まだ自由ではない」と言われます。そして同胞の民、黒人のところへいくと解放されたというのです。アブラハム・リンカーンが奴隷解放宣言に署名したと誰かが教えてくれたのですが、主人は署名してない、彼には署名する権利はない、というのです。これと同じことが霊的に起こっているとのことです。つまり、イエス・キリストは私たちを罪の試みの恐怖から解放する「奴隷解放宣言」を下さいました。けれども、自分の古い主人は、まだ自分の頑張りや肉の努力で救いを得なければいけないと教えるのです。自分の内にある古い主人が、騙しているのです。それで掟や規則で頑張らないといけなく騙している、とのことです。¹

2B キリストの恵みの無効化 2-4

² よく聞いてください。私パウロがあなたがたに言います。もしあなたがたが割礼を受けるなら、キリストはあなたがたに、何の益ももたらさないことになります。

パウロは、私が言うのだとはっきりと宣言しています。これは、彼自身が割礼を受け、律法においては非の打ちどころのない者であり、その上でキリストの福音を知ったのです。それが、「もしあなたがたが割礼を受けるなら、キリストはあなたがたに、何の益ももたらさないことになります。」ということなのです。

ここでの問題は、ガラテヤ人の信者たちの割礼が、「自分の義を認めもらうために、自分自身で達成する」ということです。割礼を受けることによって、アブラハムの契約の民、すなわちユダヤ人の中に入り、それで初めて救われるのだということです。イエスを信じるだけではなく、あなたはユダヤ教徒にならないといけなく改宗であります。

そうすると、キリストの義ではなく、自分自身の中に義を見いだそうとしているのです。私たちが、自分自身の肉の力で達成しようとする時に、何が起きているかといいますと、キリストは何の益もないのです。主が、ゲッセマネの園において祈られた時に、「もしできますならば、杯を取り除けてください。」と祈られた時に、「もし、他の方法で人々が神の怒りの杯を飲まなくてよくなるのなら」という意味で祈られていました。他に人が自分自身の功德で神に義と認められるのであれば、イエス様は十字架に付けられなくてよかったのです。

¹ <https://enduringword.com/commentary/galatians-5/>

「益ももたらさない」というのは、本当に厳しい言葉です。イエス様の横にいた二人の死刑囚は、十字架の横にいても、一人は救われましたが、もう一人は救われませんでした。キリストがおられても、何の益にもならなかったのです。

ガラテヤ人に教えていた偽教師たちは、「イエスを信じるだけでは足りない。律法を受けなさい。」と追加する教えをしていました。しかし、それは全くの嘘なのです。「イエスを信じるのが全て、百パーセント。そして、もしその完全な義に拠り頼まないのであれば、イエスが貴方にとってはゼロになる。」ということであります。私たちは常に、相対的な義に囲まれています。自分がどれだけ達成できたか？20 歩？50 歩？そのような感じで考えていますが、私たちの義は神の前では不潔な着物のようなものであり、自分が最善だと思っている時でさえ、その心は汚れており、直しようがないのです。ですから、上から新しく生まれなければならず、御霊による洗いと更新によって私たちは初めて神の御心を行なうことができます。キリストが百歩の義を与えられて、私たちがこの方に拠り頼んで、この方の百歩の義を受けており、神からそうみなされているという恵みをいただいているのです。付け足すという行為は、その恵みを一切、無駄にすることなのです。

³ 割礼を受けるすべての人に、もう一度はっきり言うておきます。そういう人には律法全体を行う義務があります。

パウロは、もう一度はっきりと言っていますが、先にすでに教えていましたね。律法をすべて守り行わないものは、呪われると。律法というのは、一部を守ればよいというものではありません。目標を達成するために、20 歩守ればよいというものではありません。律法というのは、そこに神の義と聖が示されており、全てを受け入れてこそ神の御心にかなうのです。

律法主義に陥る人々の過ちは、必ずここにあります。ある部分を強調して、それによって信仰によってのみという人々によりも優ろうとするのですが、すればするほど二重基準になっていき、偽善者となっていることが明らかになっていきます。これが律法の役割なのです。その人の罪深さが明らかにされていくのが律法の働きです。けれども、本人は戒めを行なうという自分自身の義を立てようとしていますから、律法主義ほど厄介なものはありません。態度が間違っているのに、いかに自分が正しいかを証明しようと躍起になっていくからです。へりくだりとか、憐れみとか、そういった心の姿勢にこそ福音があります。

⁴ 律法によって義と認められようとしているなら、あなたがたはキリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。

これは強い言葉です。「キリストから離れ、恵みから落ちてしまった」と言っています。必ずしも、救いを失ったということではありません。この後にすぐに、「5:10 あなたがたが別の考えを持つこと

は決してないと、私は主にあって確信しています。」と言っています。しかし、恵みの中からは落ちてしまいました。

私たちがキリストから離れて、恵みから落ちるという言葉を聞くならば、それは、罪を犯してしまった時のことを言うのではないのでしょうか？もちろん罪を犯したら、聖霊によって悲しみ、悔い改め、主の憐れみを受けるべく十字架のところに来ないといけません。けれども、ここではそういうことではありません。むしろ、罪深い自分がおり、それで自分で頑張らないといけない、神にキリストに認められるために、自分自身で罪を贖わないといけないと思っていることです。そこでキリストから自分を引き離していることとなります。キリストを知る時は、必ず恵みによるものなのです。十字架から始まるのです。そしてこの方によって御霊によって清めていただき、その新しい心で主に従うのです。主に愛されたという保障の中で、初めてこの方に仕えることができます。

いつも例えて話していますが、福音は仕事ではなく、親子のような関係です。小学生の子が、自分が何か悪いことをして、親に謝ります。それで良いのです。そして親に頼り、親に聞き従います。ところが、「私が悪いことをしてしまいました。これから、私は自分の力で働きます。お父さん、お母さんに頼らずに、迷惑をかけないように努力します。」とても真面目ですが、これほど悲しませることはありません。当然、小学生が仕事をして自活できるはずはなく、親の愛や養いを全く信じないというところに、やってはいけないことです。けれどもこれがまさに、自分で律法を守り行なうことによって、義と認められようとしている試みです。恵みから落ちているのです。

3B 望みによる義 5-6

⁵ 私たちは、義とされる望みの実現を、信仰により、御霊によって待ち望んでいるのですから。

義について、どのような姿勢で臨まなければいけないかを、パウロは説明しています。「待ち望む」とうことです。私たちは、キリストの義を身にまとして、神から義とみなされています。けれども、私たち自身は義とされている訳ではありません。聖化という、キリストに似た者になっていくという聖霊による変化は経験できますが、聖化であっても、それはキリストに私たちが満たされ、この方の支配に任せていくから起こってくることであって、私たち自体は全く変わっていません。私たちは、自分がいつまでもキリストと共に十字架に付けられている状態なのです。

けれども、義に飢え渴いています。イエス様は、義に飢え渴いている者は満たされると約束してくださいました。それは、キリストが再び教会のために戻って来られる時に起こります。その時に、私たちの体は、キリストの似姿に、栄光の姿に変えられると教えられています(ピリピ 3:20-21 参照)。これが、義とされる望み、ということです。それゆえに、私たちは自分が義となることについては、待ち望むという姿勢であるのです。

そこで必要なのは、「信仰」です。私たちが信仰を持たなければ、将来、そのように罪そのものから救われるという望みを抱くことができません。目で見えていないので、そのように信じるのです。忍耐して、けれども熱心に、情熱をもって待っているのです。ですから、私たちが試されるのは、「目で見える成果を求めたい」という誘惑なのです。それは、主がしてくださることであるにも関わらず、自分自身で見えるようにしていきたいと思うようになります。それで肉で完成しようとしてしまうのです。そうならないように、しっかりと立っていないといけません。

そしてそこで、必要な力が、「御霊によって」とあるように、御霊の力です。ここからガラテヤ書において、御霊の働きについてのパウロが話し始めます。次回の学びになりますが、律法の行ないではなく、御霊に導かれることによって、肉の行ないを殺していくことについて学んでいきます。信仰によって待ち望んでいる間に、御霊が私たちの弱さを助けてくださいます。「ローマ 8:25-26 私たちはまだ見えていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。26 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。」

⁶ キリスト・イエスにあって大事なものは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。

「キリスト・イエスにあって」という私たちのアイデンティティーの置き処が大事ですね。割礼を受けているか受けていないか、という外見のことで体裁をよくしようとする動機が、異邦人の信者なのに割礼を受けようとする動きの背後にはあります。なぜそうになってしまうかといいますと、キリスト・イエスにあるというアイデンティティーが希薄だからです。水のバプテスマが示すように、自分はキリストと共に死に、キリストにあってよみがえるという結びつきがあります。その結びつきが希薄なので、外側の拠り所を求めてしまうのです。

しかし、それは先に話しましたように、「恐れ」に基づきます。人からどう思われるだろうかという恐れや不安です。しかし、大事なものは、「愛によって働く信仰」なのです。愛が源泉なのです。「ローマ 5:8:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」神が愛であり、キリストの十字架に神の愛が示されており、私たちが神の愛に留まる時に、私たちは愛しています。その愛は神への愛、また隣人への愛として現れます。

それから、「愛によって働く信仰」とつながります。神の愛のつながりがあって、その人格的な交わりがあって、そこに神を信頼するという信仰があります。ですから、5-6 節において、望みがあり、そこには信仰を働かせる必要がありますが、その信仰は、神の愛によるものです。コリント第一 13 章にあるように、信仰と希望と愛です。これは三つ巴になっており、使徒たちの手紙には、この三

つが一つとなって出てくることが多いです。

2A 邪魔をする者たち 7-12

そして、パウロはこの偽りの教えを説く偽教師を断罪する言葉を語っていきます。

1B 真理に逆らう者たち 7-9

⁷ あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたの邪魔をして、真理に従わないようにさせたのですか。

午前礼拝で話しましたように、パウロは、信仰による歩みをしばしば、競走で言い表します。よく走っているのに、最後まで走らないのです。そこに、誘惑となる障害物が多いのでしょう。他の行程に行くようにさせるものがあるのでしょう。ここでは、「だれがあなたがたの邪魔をして」と言っています。その競走に偽教師たちが妨害して、福音の真理に従わせなくさせています。

⁸ そのような説得は、あなたがたを召された方から出たものではありません。

召された方から出たものではない、すなわち人の教えだということです。神から出たもの、神が召してくださったのですが、この方から出たものでないと、必ずその教師たちは自分のところに引き寄せようとしています。無理があります。自然ではありません。チャック・スミスはよく言っていました。「あなたが聖書だけを読んで、その結果出す結論について、私は全く信頼しています。」ということ。聖書だけ読んで、出てくる結論では、モルモン教徒やエホバの証人、統一協会など、偽りの教えを説く人々のような結論は、出てこないのです。たえず、自分たちの教えによって無理に説得せねばならず、神の召しに応答するという神秘を壊わしてしまいます。

⁹ わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませるのです。

ユダヤ人は、悪い影響について「パン種」の喩えを使います。罪についても、偽りの教えについてもそうです。イエス様は、「ルカ 12:1 パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。」と言われました。ですから、偽りの教えについて語る時に、私たちは表面的には、とても細かいことを話している、というそしりを受けかねない論争になります。パン種なので、小さいので、大した問題ではない思うのです。実にこのガラテヤ書、「イエス様信じて言っているんだから、割礼云々って面倒くさいこと議論しなくたっていいでしょう？」と言われてしまいかねない内容のものなのです。パウロもテモテに、割礼を受けさせたのですから尚更のことです。しかし、パウロは、福音を語る時に、ユダヤ人に不必要なつまずきを与えないという動機で、テモテに割礼を授けました。義と認められるためのものではないのです。しかし、それが何かより義となるように動機が代わったら、危険です。このようなわずかなずれが、パン種であります。少しでもはいると、恵みを台無し

にしてしまう、全体を発酵させてしまうほどの影響力を持っているのです。

チャックがよく話していたのは、ロサンゼルス港から出向する船舶が、ハワイ島に向かう時に、僅かな角度が異なっていて、「それは大したことではない」とするならば、到着する頃には、ハワイ島から何十キロも離れているところに行ってしまうという喩えを使っていました。その僅かなずれに私たちは気をつけなければいけないのです。イエス様が、どうしてあんなにパリサイ人や律法学者に厳しかったのかと言いますと、殊更に目立つ形で悪さをしていたのではなく、おそらく他の人々にはあまり分からない、心の動機についての熾烈な確執だったのではないかと考えられます。偽りの教えはパン種であることを知ることは大切です。

2B しかるべき裁き 10-12

¹⁰あなたがたが別の考えを持つことは決してないと、私は主にあつて確信しています。しかし、あなたがたを動揺させる者は、だれであろうと、さばきを受けます。

ここでパウロは、ガラテヤの信者たちが神の恵みによって救われていることを確信しています。しかし、あまりもの異質なものに彼らが近づいているので、深刻であり、強い語調で話していました。けれども、彼らに教える者たちに対しては、確実に彼らが神に裁かれる。地獄に落ちることを宣言しています。小さき者をつまずかせることに対する厳しい裁きをイエス様が宣言されたことを思い出してください。「マタイ 18:6-7 わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首にかけられて、海の深みに沈められるほうがよいのです。7 つまずきを与えるこの世はわざわいです。つまずきが起こるのは避けられませんが、つまずきをもたらす者はわざわいです。」

¹¹ 兄弟たち。もし私が今でも割礼を宣べ伝えているなら、どうして今なお迫害を受けているのですか。それを宣べ伝えているなら、十字架のつまずきはなくなっているはずです。

パウロは、割礼を宣べ伝えていることについて「今でも」と言っているのは、昔、宣べ伝えていたのです。それは、彼が熱心なユダヤ教徒として割礼を受けることが契約の民になる、つまり救われるための条件でした。だから、もし同じように割礼を宣べ伝えているのであれば、仲間のユダヤ教徒から迫害されることはありません。

パウロがなぜ迫害されたかと言うと、「割礼を受けても、救われない」とする、十字架の言葉を宣べ伝えていたからです。彼は割礼を受けるな、と言ったのではなく、割礼を受けても、心の割礼がなければ本当の割礼ではないと言っていました。御霊による心の一新がなければ、キリストを信じることには拠る、御霊の新生がなければ無理なのです。

十字架というのは、そういう意味でつまずきを与えます。「あなたは、どんなことをやっても救われ
ない。」と正面切って教えているのです。「あなたは、もう罪の中で死んでいる。何をやっても駄目
だ、望みはない。悔い改めて、十字架を信じなさい。」とするのです。そのむごたらしい、ローマへ
の反逆罪の十字架、キリストがそのような十字架に付けられており、そこに自分の救いがあると信
じなさいと言われていたのです。だから、つまずき、「こんなことばは聞いていられない。」となりま
す。ですから、私たちにとって十字架は救いであり、いつも心に抱いていることであり、これこそ、
キリスト者がキリスト者であることを示すものです。ところが、その十字架が多くの人のつまずきに
なります。それで、反発し、敵対し、酷い時は迫害もするのです。

¹² あなたがたをかき乱す者たちは、いっそのこと切除してしまえばよいのです。

これは、パウロがいかに彼らを不快に思っているかを示している言葉です。割礼にそんなにこ
だわっている者たちは、そんなに包皮の一部を切り取ることに拘るなら、いっそのこと男性器をす
べて切除してしまいなさい、と言っています。実は、これが異教の儀式の中にあつたのです。特に
ガラテヤ地方やアジアにおいて、男性が儀式の中で去勢するものがあります。ユダヤ教の割礼を
教えているようで、ガラテヤの人たちの以前の異教の儀式に戻ったほうがいいのか？と皮肉を
言っているのです。

なぜ、そもそも、彼らの宗教や慣わしの中にそういった去勢があつたのに、ユダヤ教の割礼を持
ってきて、同じようなことをやらせているのか？とパウロは、かなり不快になっています。これは、
いろいろなことに言えます。もし、信仰生活が道徳的に生きることを求めるように変わるならば、
元々、日本にはいろいろな道徳で生きるための教えが、宗教の中にあります。なぜ、その中でキリ
ストを信じる必要が出て来るのか？ということになるのです。キリストにだけ義があり、救いがあり、
聖となるからこそ、私たちはこの方を信じているのです。

これでおわかりでしょうか？人間的に、信仰と律法を混ぜ合わせてもいいだろう、信仰と他の人
間の教えを混ぜ合わせていいだろうというのは、あまりにも安直な考えであるということです。他の
教えを混ぜたら、その時点でキリストは無益になります。オール・オア・ナッシングなのです。キリス
トですべてであり、あるいは、キリストでなければ全く無益であります。